

初期ヘミングウェイ覚書

——「三日のあらし」を中心に——

樋口日出雄

トルーマン・カポーティ (Truman Capote) の代表作『ティファニーで朝食を』 (*Breakfast at Tiffany's*) 作中にみる女主人公 Holiday Golightly は名刺に、

〈よろめき地方廻りも辞せず (Travelling)〉

と刷り込んで、男性の理性の口をも閉じさせ、認識の眼をも眩ませて変則的なニューヨーク生活を送ってみせた。新造貨幣のようにすがすがしい女の顔にうれいが含まれるのを横眼に、ヘミングウェイはパリのカフェで、一種の抑制を加えた文体を以って、木の葉の落ち尽したあとの北ミンガンの風の目を拉し来って、一篇の身辺雑録風消息文をなし、日の半ばを費やす気兼ねのない酒盛りを写して、男性心理の細密な叙述を完成した。その作が短篇集『われらが時代に』 (*In Our Time*) に収められた「三日のあらし」 (*The Three-Day Blow*) である。

群小リトル・マガジンが割拠するパリで、文学修業に精を出していたヘミングウェイが他に比を見ない生ま生ましい戦争体験をもとに、〈Travelling〉並みの風流社交用語もまじえて旗上げ興行的に世に問うたのが、この『われらが時代』一巻であり、集中の一篇「三日のあらし」にも〈Travelling〉モチーフの転用が見られることは予想されるであろう。当時通用した一種の〈軟派語〉を、巧みにあやつり表現領域の拡大を計る技法は、多角的な『われらが時代』中、数ある名篇のなかでも本領と目される〈ニック・アダムス物〉に、深い影を宿しているのではないかと思われる

るので、ここに試論を草し問題点の解明を期す次第である。

I

かつて、いいだ・もも氏は

〈Miss Holiday Golightly Travelling〉

をクロス・オーバーさせ

〈神聖休日嬢 いそいそと旅する娘〉

という訳を考案してみせた。筆者の私見は〈『ティファニーで朝食を』論〉で詳しく草した通りだが、必要な限りでここに再説することにしたい。細かいニュアンスについての穿鑿は、カポーティの作品論ならざる本稿ではひとまず匙を投げるとしても、次のことは再確認の要があろう。

独身女性を売り込む惹句として〈Travelling〉という文句がある以上、〈神聖休日嬢〉という聖所遍歴的な感じは、男を同伴に、かつまた休日がいいことにして、〈いそいそと旅〉してみせては、せっかくの惹句のぶちこわしとなるのではないか。ここはどうしても旅回りの〈よろめき〉に連座するというニュアンスだろう。したがって〈Travelling〉という稼業には、かき入れどきがある筈である。パーティで殿方が破目をはずす。あげくに自分の生活を見なおして、生活をかえたいと思う。その時がチャンスである。室内照明を落としたドメスティックなムードがこの文句にある。いわばお座敷がかかるのだから、この稼業の女性に結婚は無理だろう。彼女が人生の師とたのむのは〈ティファニー店〉の堂々とあたりを払う威風であり、このためわざわざこの店の演出にかかる書体で名刺を刷るのである。この名刺にみる趣向は風流心に富み〈いそいそと旅〉に急ぐひたむきな姿は影を潜めていよう。むしろ〈いそいそと〉した超特急人生、英語にいう

〈rat race ネズミの競争〉に似た現代生活の忙中に閑を求める仕儀である
とさえいえよう。

ヘミングウェイ研究者フィリップ・ヤングの協力を得て編まれた *The Nick Adams Stories* (1972) では、「三日のあらし」は姉妹作の「ことの終り」(The End of Something) と他の二篇を伴って 〈A Soldier Home〉 というキャプションのもとに収められている。つまり、第一次大戦より復員した兵士の物語というわけで、この四篇が一括されているのである。上記両作品ともに作中の時代設定は1919年であると、多くの評家が指摘していることからいえば、終戦直後を背景としていたことになるのだが、人によってはワールド・シリーズに不正試合の疑いがかかった年であることを想起するかもしれない。作中にジャイアンツの監督 McGraw が、球団を問わず選手をひき抜く辣腕ぶりを Nick と Bill がずばり衝くのは、1919年度のワールド・シリーズの不正事件の遠い反響というべきであろう。

—What did the Cards do?

—Dropped a double header to the Giants.

—That ought to cinch it for them.

—It's a gift. As long as McGraw can buy every good ball player in the league there's nothing to it.

—He can buy them all.

—There's more to it (buying the player) than we know about.

—Of course. But we've got pretty good dope for being far away.

—Like how much better you can pick them if you don't see the horses.

—カージナルスの試合はどうだった。

—ジャイアンツとのダブルヘッダーを落としたよ。

—馬の子をねじふせるようなものだったろうぜ。

—馬を一頭くれてやったようなものさ。だが McGraw の奴が

リーグ中の名選手を買い取ることができるのなら、馬一頭や
ったところで物の数ではないがね。
—奴は根こそぎ買い取れるぜ。…
—トレードには俺たちがあずかり知らぬ靈験があるのさ。
—そうだ。しかしあずかり知らぬところにいるわりには、俺た
ちいい線いってるよ。
—馬を見ない方が、ぴったり勝ち馬を見抜く率が良いようなも
のか。

〈註(1)カッコ内は筆者〉

II

筆者は先にひいた『ティファニィで朝食を』論の中で——

作中を貫く〈Travelling〉が、異性とのあいだの地方廻り観
光旅行のように、生活のリズムを大きく詩的にゆさぶるもので
あるとするなら、作品末尾の円舞曲的〈^{ワン・バツ・パー}一・二・三〉は、〈片
眼あき〉がこの世を生き抜くための相対的劣位と優位を、はず
みをつけて〈跳走〉させる手立てともいえる。作中の導入部で、
語り手の「私」がニューヨーク市内のある酒場の前で見かけた
風景の中に、ニューヨークに上陸したオーストラリア兵の酒臭
い一団が一人の女性を spin-dancing させている場面があり、
その兵士の一団はホリーを踊りの相手とし、何と 'Waltzing
Matilda' を合唱していたのである。この〈ワルツ〉で始まり、
〈ワルツ〉で終わる首尾は見事だという他はない。

〈註(2)〉

と、ホリーが〈^{ワン・バツ・パー}一・二・三〉というワルツのリズムに促された存在であ
ることを論じたが、〈三日のあらし〉のシムバルワークは、作中の二人
Nick と Bill にとっての〈^{ワン・バツ・パー}一・二・三〉であろう。

フィッツジェラルドの代表作『偉大なるギャツビー』(*The Great Gatsby*: 1925)の最後の部分で、ギャツビーの遺品を見せられた作中の語り手は、一冊の大衆小説を見出し、それが西部劇の英雄で悪名高いブッチ・キャサデイを主人公とした一代記であることを知る。この通俗書のカヴァーに書き込まれた、ドメスティックという他ない(フロは二日に一度)ギャツビーの日課表は、一度心に決めた女性を〈dust off〉できない男性のロマンチックな夢を追う記念物となっている。

〈地方廻りも辞せず (Travelling)〉という惹句は、ギャツビーにあって金銀財宝のありかに神出鬼没のヒットエンドラン戦法による攻略を果たすキャサデイの宣伝惹句も同然である。ギャツビーの日課表には、

〈Baseball and sports 4:30—5:00〉

と日中半時間の野球練習を義務づける一項がある。ことは西部劇を踏襲した『偉大なるギャツビー』においても不変であり、〈Travelling〉のリズムに無宿者の野球選手の渡り者人生を見ているのである。

「ことの終り」は Marge という女性を〈dust off〉するために、Nick が Bill と相談ずくで打った芝居であり、別れの必要に迫られた Nick が、Marge とよりを戻す危険をつみとるため Marge に向い

—You know everything.

〈いやになるほど自信満々だな〉

とビーン・ボールまがいの難球を投じて、Marge を二度と Nick の前に顔を出させないように強要したあげくに

—It isn't fun any more.

〈これ以上の交渉はお断わりだ〉

という口実で女を袖にするのである。「三日のあらし」は、この作のあとを受けて、いったん袖にした女を再交渉の対象にする。和風にいう〈袖の別れ〉とは、男女が互にまといかわした袖を解き離して別れることだが、「三日のあらし」には差しかわす片袖くらいはあるのである。

III

Marge という女の子を別扱いにすれば、何から何まで男性色一色にみえるこの物語で、唯一つの女性名詞の扱いを受けるのは〈三日のあらし〉という初秋の自然現象であるからには、岬 (Ten Mile point) で女と別れた Nick が Bill の小屋の戸口にたたずみ、二人して岬を見下して

—She's blowing.

〈カゼッ娘 吹いてるね〉

というところは、秋のけしきを口に出してみただけにとどまるまい。胃の腑にウィスキーを流し込む算段をしながらも、身辺雑談風の現世的愉楽のなかから、物語というキャンパスにメチエを動員して女の輪廓をとらえようとしていることは動くまい。我々はその近似値を、新造貨幣のようにすがすがしい顔立ちをした、パリのカフェに出入りする娘に見出したが、そのカフェで「三日のあらし」を仕上げたヘミングウェイが、女のイメージを再鑄造すべく顔を向けると、件の女性はどこかの男と姿を消していたのである。

北ミシガンに吹きすさぶ〈三日のあらし〉は、ホリーを〈Travelling〉にかきたてる〈ワルツ〉ほどではないが、作中の二人の男性が口にする口語体とスラングのリズムにのり移って、木の葉を散り敷いた〈褐色〉の肌色をみせる土地に特有のムードを喚び起こす。

1931年に書かれた「褐色時代」と題するエッセイで、L・マンフォードは、ニューヨークの公共建築に褐色岩が使われはじめ、暗いクルミ材の家

具が使われだした1865～1895年の時期を問題にしている。ホリーは第二次大戦の戦時色一色の時代を、〈^{ザ・ミン・レッズ}辛気臭い赤っ茶け〉とよんで毛嫌いした。第一次大戦直後のヘミングウェイの短篇にみるムード設定にも、その〈赤-褐色〉という色相はあるようだ。

上記のエッセイでマンフォードは「褐色時代」に生きたアメリカ人建築家のリチャードスンがヨーロッパにおいて出くわした体験について述べている。

ばかでかい体のリチャードスは、怪物のような連れとともに、ヨーロッパの浮浪者の注意をひき、サーカスの団員だと思われた。一度などはずばりこうきかれたものだ——「小びとはいつ来るのか。」

〈註(3)〉

初期のヘミングウェイの短篇にみる主人公たちが、プロ野球選手など流れ者についてもつ感想は、ヨーロッパ人がアメリカ人についてもつ感想に似ている。間が抜けたサーカス団員の刻印が、プロ野球選手にまで着いて回るのだからどうしようもない。《They ought to cinch it for them》とは、曲馬団の訓練された馬に、さらに腹帯をつける二重唱型の間が抜けた仕事のとえでもあろう。

ホリーはマグという女性と組んで〈二人兼業にて地方廻りも辞せず (Travelling together)〉という二重唱型の標示を出したことがあるが、戦争を精神的傷跡とした〈褐色〉時代には、それが二倍の厚顔さに映るのかもしれない。ヘミングウェイの女性観が、ときに偏執なまでにくつろいだ余裕がないのは、このような時代色に首までつかっていたからである。やがて人々は、方向を失い困惑したアメリカ人を〈失われた世代〉とよぶことになる。

IV

〈茶色い戦争ありまして…〉と中原中也は唱い、総攻撃は赤と黒とにわめき 〈roar red and black〉とヘミングウェイは唱った。一旦失ったパリでの文学見習者としての地位をとりもどすべく、新たにカナダの新聞のパリ特派員の資格でこの国際都市に帰り咲いた頃の作品においてである。当時パリには〈失われた世代〉の名付け親の Gertrude Stein がいた。シェイクスピア書店を経営するアメリカ人シルヴィア・ビーチがいた。「三日のあらし」を完成したと覚しき1924年には、ヘミングウェイはスタインにあてつけた

In the rain in the rain in the rain in the rain in Spain.
Does it rain in Spain.
Oh yes my dear on the contrary and there are no
bullfights.

という詩句を含む “The Soul of Spain (In the Manner of Gertrude Stein)” という小詩篇をドイツの文芸誌 *Der Querschmitt* にのせている。同じ年に Edmund Wilson により Stein の *Three Lives* を継承する者として保証されたヘミングウェイが、すでに師とたのむ Stein に反目し、独自の途を目指していることがわかるのである。「三日のあらし」は〈褐色〉の旋律で果断にもパリ在住の先輩諸氏に向けて〈返歌〉を挑んだ作品であろう。

ニックは丸太をかかえて、台所に入り、そこを通り抜けようとしたとき、調理卓の鍋をたたき落してしまった。

丸太をおき、鍋をとった。乾燥アンズが、水に漬けてあったのだった。彼はよく気をつけて、床に落ちてあったアンズを一つのことらず拾った。ストーヴの下に入ってしまったのまで、す

っかり拾って、鍋に戻した。卓の脇のバケツから、水をたっぷり注いで、アンズを漬けた。大いに気持がよかった。まだ少しも酔っていないことが分かった。

「三日のあらし」を和訳してみせた北村太郎氏は、上の個所を引いて

ニックが、ビルに薪をとりに行ってきてくれ、と頼まれて、薪をかかえて部屋にはいり、しくじりをやらかした場面である。最後の二つのセンテンスは、原文では *He felt quite proud of him. He had been quite practical.* となっていて、わたくしの訳文は、やや意識にすぎきらいはあるが、わたくしはこの部分に、むしろニックの酔いが、はっきり出ているのを感じる。

〈註(4)〉

と考察しているが、これは詩人らしい洞察であろう。

V

エデンと失楽の昔から人類に親しいものとなった〈禁断の実〉リンゴを格子縞のコートに忍ばせたニックは、水割りを賞味してけだるい快さにひたる。くせの悪い馬を馴らす〈ブランコ・バスター〉の芸は、アメリカ人をうならせる馬術大会での呼び物であるが、アメリカ人が異性に〈なびく〉ことを〈fall for ~〉と表現するのは、この馬術やアルコールの痛飲にひきくらべてみると、相当に皮肉の利いたフレーズィオロジーとなるろう。Bill はいわくありげに Nick に向い

—Fall for them but don't let them ruin you.

〈女になびくのはよいが、それでずるずるとこわれものにされてはならないよ〉

と忠告するが、女（多分に Stein の面影があろう）の杓子定規の注文通りの生活に、ニックが陥ってゆくことを、裂け目や編み目が伝線してほつれゆくことにたとえたままではよいが、ついうっかりとくよりが戻る (get back into it) 可能性を口にして、ニックをして

—Sure, there's always that danger.

〈そうなんだ、そんなざまをさらすこともよくあるんだ〉

と言わしめ、女になびき続けても結果として不首尾でない、継ぎ合わせの人生もあることに気づかせてしまう。〈Travelling〉という惹句は、ニックにあって〈なびきゆく (fall for)〉という挫折行為のあとにくる

〈(ボロを着てでも) 地方廻りも辞せず〉

という、替着無し晴着無しの継ぎ合わせ人生のモットーとなる。愛の挫折を味わい、ビルという友人にたよって引出をひっかけ回していたら古ぼけた衣服が見つかり、急ぎの旅の間に合わせようというあんばいである。あの失楽の〈リンゴ〉を忍ばせた格子縞のコートが、ニックの〈古ぼけた衣服〉であったことはいうまでもない。コートをひっかぶって〈三日のあらし〉の外気の中に出てゆくニックは、週末に町までのしてゆく気概が感じられる。

人間という地に呪われた、放逐された存在につき添い、果てまで同行しようとする〈同行二人 (Travelling together)〉の姿をニックに認めることも恣意的な読みだとばかりは言えないのである。Nick と Bill が Jake Barns と Bill Bird と名をかえて、スペイン・フランスを観光旅行する居候集団にまじわる物語が *The Sun also Rises* と題され、用意されるのも当然のなりゆきであろう。フィツジェラルドがこの作品を 'travel guide' とよぶのも頷けるところである。

Notes

- (1) E. Hemingway: *The Nick Adams Stories* (Bantam Book, New York, 1973) pp. 187-188.
- (2) 拙論：〈『ティファニーで朝食を』論〉（梅光女学院大学英米文学会「英米文学研究」第14号）
- (3) ルイス・マンフォード：『解釈と予測 I』（生田勉・木原武一訳，河出書房新社，1975） p.111.
- (4) 北村太郎：短篇について〈わたしの読み方〉（石一郎編『ヘミングウェイの世界』所収，荒地出版社，undated） p.222.